

## 閻魔様に舌を抜かれる話

高橋 実

嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれる。嘘をいう者は死後の世界で地獄に落ち、閻魔大王に舌を引き抜かれるという民間説話で、二度とつけなくなるという嘘つきへの戒めである。

この諺が民話の中心になっているので、この諺が通用しないこの民話は成り立たらない。

「うそきさざなみ」という民話がある。「うそをこく」とはうそを言う意味である。うそきさざなみが娑婆で嘘ばかりついているので、閻魔様がさざなみを地獄に連れてくるように鬼に命じる。赤鬼と青鬼が火の車に乗せてさざなみを地獄の閻魔様の前に連れてくる。さざなみは、閻魔様の前に連れてこられ、閻魔はさざなみのうそきを責め、釘抜で舌を抜こうとする。するとさざなみは「閻魔様待ってください。うそのこき納めにもう一度だけうそをこかしてほしい」と頼む。閻魔様「どうせお前は舌を抜かれるのだから、許してやろう」という。さざなみは「もし俺のうそがほんとうだったら、どうしますか」と聞く。閻魔様は「本当だったら娑婆へかえしてやる」という。さざなみは、「そうすれば、あべこべに閻魔様の舌を抜くが」。その閻魔様は「でっこのうそをついたな」と舌を出し大笑いする。その閻魔の舌をさざなみは釘抜で抜いて、さざなみは「さあ、これで約束通り、娑婆へ帰れる」罪人台帳を真黒に塗って娑婆に戻ってきたという話である（「むかしがあっただ 第2集」 水沢謙一 濁沢 川上利根吉 昭和32年）

この話で「もう一度うそを言わせてもらいたい」と頼むさざなみのこの最後の言葉が、閻魔は嘘と信じているので、許すが、さざなみは嘘ではなく、本当の事をいう。この所が少し煩わしい。「最後のうそ」と言いながらさざなみは本当の事をいう。閻魔はそれがさざなみのことだからと嘘だと思う。このすれ違いがこの話のキーワードである。うそききで通っているさざなみが本当の事を言うとは誰も信じない。

その虚を突いて生き延びる。そういえば「うそのつきおさめ」という話もある。日頃うそききで評判の男が死ぬ間際に遺言で銭が入った瓶を埋めてあるという。まさか死ぬ間際までうそをつくまいとその男の死後瓶を開けたら、そこには紙きれ一枚だけはいっていて、「うそのこきおさめ」と書いてあったというのである。最後までうそききで徹した男と、最後は本当のことを言った男。正反対の二つの話。これは何を言おうとしているのであろうか。思い込みというもの愚かさを警告しているのではないだろうか。「まさかあんな人がこんなことを言う筈がない。こんなことをするはずがない」という思い込みが失敗に結びつく。この話は、うそききの戒めとともに世間の常識がいかにもろいものか。それを教えているのかもしれない。